

Title	批評家メルヴィル：“Hawthorne and his Mosses”における国家と文学
Sub Title	Herman Melville as a critic : literary nationalism in “Hawthorne and his Mosses”
Author	大和田, 俊之(Ohwada, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.46 (2005. 3) ,p.143- 156
JaLC DOI	
Abstract	<p>This essay explores the diverse aspects of literary nationalism in Herman Melville's renowned essay, “Hawthorne and His Mosses” (1850). Whereas Melville champions the American writers and anticipates the emergence of “American literature,” -which means that he persists in the particular rather than the universal— he himself writes this essay anonymously and pretends as if he were “a Virginian Spending July in Vermont.” This auctorial strategy can be explained by the theory proposed by Benedict Anderson in his monumental work <i>Imagined Communities</i> (1991). According to Anderson, what differentiates the medieval era from the modern time is its sense of time. As the religious communities of medieval mind decline, the simultaneous sense of time has come to take place where a person can share the same sense of time with a total stranger living far away. Anderson concludes that this “idea of ‘homogeneous, empty time’,” to borrow from Benjamin, enabled to form the idea of nationalism. Then Melville, by disguising himself in the essay as a Southerner who has never seen Hawthorne, can be said to be reinforcing the idea of nationalism because of his anonymity. Another significant aspect of Melville's essay is that he compares the “excellent books” to “foundlings.” Here, he seems to be suggesting that the authority of a literary work should be carefully denied. This contradicts with the idea of “possessive individualism” proposed precedently by Wai Chee Dimock. However, by referring to the arguments of Ellen Weinauer, where she uncovers the new idea of “literary brotherhood” implied in Melville's works, we conclude that the disappearance of the author's name in Melville's essay not only makes it possible to establish the idea of literary nationalism, but also suggests an alternative way of possessing art.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20050331-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20050331-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評家メルヴィル  
——“Hawthorne and His Mosses”  
における国家と文学——

大和田俊之

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) がエッセイ「ホーソンとその苔」(“Hawthorne and His Mosses”) を発表したのは、1850年8月のことである。*Literary World* 誌に二週に渡って掲載されたこの書評は、メルヴィルの本格的なホーソン (Nathaniel Hawthorne) 論として知られるばかりか、現在では19世紀アメリカを代表する批評として名高い。よく知られているように、メルヴィルはここで文学的ナショナリズムともいえる主張を繰り返している。ヨーロッパとは異なるアメリカ独自の文学を育み、称揚することが急務であると彼は認識していたのだ。

Let America then prize and cherish her writers; yea, let her glorify them. They are not so many in number, as to exhaust her good-will. And while she has good kith and kin of her own, to take to her bosom, let her not lavish her embraces upon the household of an alien. (247)<sup>1</sup>

しかし、こうした文学的ナショナリズムがどのような文脈で展開されているのかという点については、未だ詳細な研究はなされていない。またホーソンに対する同性愛的感情との関連性についても再考の余地があるだろう。本稿では、このエッセイが内包する矛盾をあぶり出した上で、それがどのような形でナショナリズムと結びついているのかについてつぶさに検

証する。その過程で、19世紀アメリカにおける文学のオーソリティーの問題が浮上してくるだろう。

まずはメルヴィルとホーソーンの関係を概観する上でも、その歴史的背景について少し触れておこう。このエッセイが発表される半年前に、彼は著書『ホワイト・ジャケット』(*White-Jacket; or The World in a Man-of-War*)を宣伝するために赴いたヨーロッパから帰国したばかりであった。メルヴィルはイギリスの出版社との交渉中に著作権の問題にたびたび遭遇し、アメリカの作家であるが故に不当な扱いを受けたことについて苦々しく日記に記している<sup>2</sup>。帰国後のメルヴィルは、イギリスとアメリカの文壇の違いに敏感になっていたのである。そして、8月5日にメルヴィルは初めてホーソーンと出会う。当時彼は前年に発表した『マーデー』(*Mardi; and a Voyage Thither*)の不評に甘んじていながら、既に大著『白鯨』(*Moby-Dick; or, The Whale*)の創作に取りかかっていた。その席には知り合いの編集者の他にオリヴァー・ウエンデル・ホームズ(Oliver Wendell Holmes)も同席しており、メルヴィルとホームズは、途中からイギリスとアメリカのどちらの文学が優れているかについて激しい議論を展開したといわれている。ホームズがイギリス文学を高く評価するのに対して、メルヴィルはアメリカ文学の可能性を強く主張するのである。

多くの研究者は、「ホーソーンとその苔」に“(for I never saw the man [Hawthorne]; and in the chances of a quiet plantation life, remote from his haunts, perhaps never shall)”(249)とあるにもかかわらず、メルヴィルがホーソーンと出会う以前にこのエッセイを執筆したことに懐疑的なのは、その内容が8月5日の会合を踏まえて書かれたものだと思われるからだ。そもそも、このエッセイには発表時にメルヴィルの名は記されていない。著者名の欄には“By a Virginian Spending July in Vermont”とあり、匿名で掲載されているのである。ホーソーンとの出会いを意図的に隠匿するばかりか、北部出身のメルヴィルが南部人を装う身振りには、いかなる文学的戦略が込められているのだろうか。

## 1. 民主主義社会における文学

「ホーソンとその苔」には、19世紀アメリカ社会における作家メルヴィルが抱えていた矛盾が象徴的に表れている。それは、マイケル・ギルモア (Michael T. Gilmore) も指摘するとおり、「民主主義的信念」において書くことと「民主主義的社会」のために書くこととの間に横たわる矛盾である。大衆社会の台頭に伴い、当時は芸術と社会の関係についても多くの議論が展開されていた。アレクシス・トクヴィル (Alexis de Tocqueville) は、商業の発達が芸術にとって致命的な痛手になりうることを既に示唆していたが、当時のアメリカではそれに対する反論が多数提出されていた。大衆社会が芸術にとって好都合なのは、芸術家がこれまでのように一人のパトロンに依存する必要がなく、職業作家としてその努力が報われやすいからだ、というのが彼らの主張である。しかし、文学市場の台頭は同時に批評家という職業をも顕在化させ、その結果文学の商業化が進めば進むほど、職業作家の評価が一握りの批評家の存在によって左右されるようになる。つまり、批評家のパトロン化という現象が起きるのである。メルヴィルの「ホーソンとその苔」は、この矛盾を文字通りテキストに内包した作品だといえるだろう。マートン・シールツ (Merton Sealts Jr.) を初めとして多くの研究者が指摘するように、このエッセイは、ホーソンの作品の書評というよりは、メルヴィル自身の文学観の表明だといえるのだ。

メルヴィルの文学的ナショナリズムとも言える主張は次の文に明らかである。

And all that is requisite to amendment in this matter, is simply this: that while freely acknowledging all excellence, everywhere, we should refrain from unduly lauding foreign writers and, at the same time, duly recognize the meritorious writers that are our own; —those writers, who breathe that unshackled, democratic spirit of Christianity in all things,

which now takes the practical lead in this world, though at the same time led by ourselves—us Americans. (248)

ここでメルヴィルは、アメリカの「民主主義の精神」(democratic spirit)に対する期待を表明している。それにもかかわらず、メルヴィル自身は民主主義の精神が社会に広く浸透することに非常に懐疑的であるようにみえるのだ。例えば、彼はホーソーンを評価する際に次のようなレトリックを用いている。

For spite of all the Indian-summer sunlight on the hither side of Hawthorne's soul, the other side—like the dark half of the physical sphere—is shrouded in a blackness, ten times black. But this darkness but gives more effect to the ever-moving dawn, that forever advances through it, and circumnavigates his world. (243)

ここはエッセイの中でも最も頻繁に引用される部分だが、ホーソーンの特徴を「光」と「闇」の部分に分け、「真実」は「闇」の部分に含まれていると主張するメルヴィルは、そもそも「闇」の部分が一般的な読者の理解を得られるとは考えていない。ホーソーンテキストは、シェイクスピアと同じように「真実」を伝えるものであり、その真実は結果的に選ばれしものにはしか伝わることはないのである。その結果、メルヴィルはホーソーンと読者の関係について次のように結論づけることとなる。“But with whatever motive, playful or profound, Nathaniel Hawthorne has chosen to entitle his pieces in the manner he has, it is certain, that some of them are directly calculated to deceive—egregiously deceive, the superficial skimmer of pages.” (251) 「ページを表層的に辿る読者には、真実が届くことはない」とするメルヴィルの民主主義精神とはいかなるものであろうか。また、“‘Who in the name of thunder’ (as the country-people say in this

neighborhood) ‘who in the name of thunder’, would anticipate any marvel in a piece entitled ‘Young Goodman Brown’?” (251) と驚いてみせるメルヴィルは、ここで万人に向けられたホーソーンの表層、つまり作品のタイトルと、真実が眠る深層であるところの作品の内容とに呼応させながら、偉大な作家が否応なく読者を欺かざるをえないことについて語るののである。

では、メルヴィル自身はどうだろうか。文字通り『詐欺師』(*Confidence-Man; His Masquerade*) という作品を残しているメルヴィルは、先に述べたとおりこのエッセイを匿名で記すことによって、ホーソンと同じように読者を騙し、読者に対して詐欺を働いているといえる。そしてこの匿名性は、メルヴィルの「真実」の概念と密接に関わり合いがある。

For in this world of lies, Truth is forced to fly like a scared white doe in the woodlands; and only by cunning glimpses will she reveal herself, as in Shakespeare and other masters of the great Art of Telling the Truth, —even though it be covertly, and by snatches. (244)

「真実」は巧妙な一瞥によってのみ露になるという主張は、メルヴィルの他の作品にもたびたび言及されるモチーフである。

メルヴィルの作品において、「真実」は常に遠回しに伝えられるという形で物語の中に現れる。『白鯨』第54章の「タウン・ホー号の物語」(“The Town-Ho’s Story”)において、イシュメールはこの逸話を読者に伝える際にひどく複雑な手法を用いていた。そもそもタウン・ホー号の白人水夫三人が、ピークオッド号とすれ違った際に銚打ちタシュテゴに聞かせた話を彼が寝言で口走ってしまい、その結果イシュメールを初めとするピークオッド号の船員が知ることになったという経緯も込み入っているが、それを読者に伝える際に、イシュメールはわざわざ「以前にリマでスペイン人の友人に囲まれてこの話を語った時の様子」をもとに書き付けるのである。また、迂回を施しつつ読者に向かって間接的に語りかけるこの手法は、

死後出版された『ビリー・バッド』(*Billy Budd; Sailor*)において語り手がクラガートの性格を描写する際にも採用されている。語り手はクラガートの性格を掴みきれず、結果的に次のように述べているのである。

But for the adequate comprehending of Claggart by a normal nature these hints are insufficient. To pass from a normal nature to him one must cross “the deadly space between.” And this is best done by indirection. (*Billy Budd* 74)

「真実」に到達するためには「間接的に語られるのが最も適している」とする語り手は、迂回を持ってのみ文学的真実を垣間見ることができるとする「ホーソンとその苔」の主張と呼応するものである。

## 2. 匿名性とナショナリズム

「ホーソンとその苔」における匿名の問題を別の角度からみてみよう。今やナショナリズムを論じた文献としては古典ともいえる『想像の共同体』(*Imagined Communities*)において、著者ベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)は興味深い分析を提示している。中世の世界を支配した宗教共同体や王国が衰退し、人民を統合するイデオロギーとしてナショナリズムが台頭するが、その特徴として時間感覚の変容があげられるというのだ。アウエルバッハを援用しつつ、アンダーソンは宗教共同体における時間が次のようなものであったと論じている。

This juxtaposition of the cosmic-universal and the mundane-particular meant that however vast Christendom might be, and was sensed to be, it manifested itself *variously* to particular Swabian or Andalusian communities as replications of themselves. Figuring the Virgin Mary with ‘Semitic’ features of ‘first-century’ costumes in the restoring

spirit of the modern museum was unimaginable because the mediaeval Christian mind had no conception of history as an endless chain of cause and effect or of radical separations between past and present. (emphasis original Anderson 23)

ベンヤミンが呼ぶところの「メシア的時間」、すなわち即時的現在における過去と未来の同時性が支配する空間においては、予兆とその成就によって共同体が形作られている。それに対して、こうした中世の時間感覚に代わって近代に現れたのが「均質で空虚な時間」であったのだ。

What has come to take the place of the mediaeval conception of simultaneity-along-time is, to borrow again from Benjamin, an idea of ‘homogeneous, empty time,’ in which simultaneity is, as it were, transverse, cross-time, marked not by prefiguring and fulfilment, but by temporal coincidence, and measured by clock and calendar. (Anderson 24)

近代の時間感覚においては、見ず知らずの人間同士が互いに面識がないままに同じ時間を共有しているという感覚が生まれ、それこそがナショナリズムの基盤になったというのである。それはまた、小説において新たな描写を可能にする。互いに見知らぬもの同士が同じ時間を共有することによって、別の場所で暮らす二人（あるいは多数の）の登場人物が、すれ違うことなく関係性を持っていることが読者に伝えられるようになる。“An American will never meet, or even know the names of more than a handful of his 240,000-odd fellow-Americans. He has no idea of what they are up to at any one time. But he has complete confidence in their steady, anonymous, simultaneous activity.” (Anderson 26)

この点をふまえた上で、ふたたび「ホーソンとその苔」の分析に戻ろう。繰り返し指摘してきたとおり、メルヴィルはこの作品を「ヴァージニ



ア人」という架空のペルソナを装って執筆している。しかも、ホーソーンは「これまで会ったこともないし、これからも会うことはないだろう」(249)と述べているのである。アンダーソンの議論に即して論じるならば、ここでは互いに見知らぬ二人の作家が、それでもなお「アメリカ」という時間と空間を共有していることを示すことで、一つの文学的な運動を育もうとする決意を読み取ることができる。ホーソーンは他人であることを装うことによって、逆に「アメリカ文学」という近代的なナショナリズムの装置が駆動し始めるのである。メルヴィルは見ず知らずの人間との「魂の交流」が可能である点について、端的に次のように表現している。“He [Hawthorne] expands and deepens down, the more I contemplate him; and further, and further, shoots his strong New-England roots into the hot soil of my Southern soul.” (250)

アンダーソンは、『想像の共同体』のなかで、ナショナリズムを象徴するものの一つとして「無名戦士の墓と碑」をあげている。何千もの兵士が、匿名でありながらも一つの共同体の一員として歴史を形作っている。メルヴィルの文学的ナショナリズムの宣言が、単に匿名であるだけでなく、北部と南部を巧妙に接続することで「アメリカ」という時空間を立ち上げていることは注目に値するだろう。

### 3. オーソリティーと国民文学

そもそも作品にとって作家とはどのような存在なのだろうか。メルヴィルはエッセイの冒頭、何の前置きもなく唐突に次のように述べている。“Would that all excellent books were foundlings, without father or mother, that so it might be, we could glorify them, without including their ostensible authors.” (239) 作家から切り離され、「孤児」として広まる偉大な作品は社会の共有物となる。メルヴィルはここで偉大な文学は作品から作家の存在が消滅しなくてはならないと主張しているのである。自らの作品を匿名で発表し、「孤児」としての文学作品を夢想するメルヴィルが、文学のナ

シヨナリズム、すなわち文学における固有名の存在にこだわるのは一見矛盾するようにみえるかもしれない。また、今ひとたび同時代の文壇の状況を鑑みたときに、国際著作権の創設によってアメリカの作家を育成しようとした「ヤング・アメリカ」(Young America)の運動に加担したメルヴィルの立場とも齟齬を来しているようにも見える。しかし、彼はアメリカにおける真の作家の到来を熱望しつつも、次のように付け加えることを忘れていない。

But it is not meant that all American writers should studiously cleave to nationality in their writings; only this, no American writer should write like an Englishman, or a Frenchman; let him write like a man, for then he will be sure to write like an American. (248)

「人間として書くならば、それは自動的にアメリカ人としての作品になるだろう」とするメルヴィルは、ここで幾分結論を濁しているようにも見える。

さて、文学作品の「孤児」性を考える際には、特に文学市場が形成されつつあった19世紀アメリカにおいては、作家の作品に対する所有権の問題を考慮する必要がある。メルヴィルは作家と作品の関係についてどのように考えていたのだろうか。エレン・ワイナワー (Ellen Weinauer) はこの点に注目し、資本主義社会が職業作家を生み出し、個人的所有権をますます確立させていったのに対して、メルヴィルはそれに対するアンチテーゼを唱えていたのだと主張する。これはワイ・チャー・ディモック (Wai Chee Dimock) がメルヴィルの作品群に強固な個人主義 (individualism) を見いだしたのとは真っ向から対立する主張である。ワイナワーは文学的「剽窃」(plagiarism) という用語の語源を辿り、それがラテン語の「誘拐」(kidnap) を意味する言葉であったことを指摘する。また、「親／子」「主人／奴隷」と平行な関係性が「作家／作品」に見いだされることで、「剽窃」とはまさにその繋がりを断ち切り、転覆するものとして捉えられてきたこ

とを明らかにするのである。

Like the abolitionist who challenges the assertion that slavery is a natural and benevolent institution, like the feminist activist who argues that patriarchy is a violation of the “natural rights” of women, the plagiarist acts as a kind of cultural agitator, questioning—and casting doubt upon—conventional relations. (Weinauer 700)

「剽窃」とは、それゆえ近代的所有関係の転覆そのものであるといえる。そのうえで、ワイナワーはメルヴィルの匿名性が近代的所有権とは別の新たな所有の可能性を示唆し、オルタナティブな「連帯 (brotherhood) を模索していたのだと結論づけるのである。

The literary “brotherhood” stands in opposition to the capitalist brotherhood: the latter depends on a concept of private ownership and competitive acquisition—a concept that underwrites antebellum anxieties about plagiarism; the former depends on common property and shared achievement. (Weinauer 706)

作家と作品の関係、つまり作家は自らの作品をどれだけ所有しているのかという問題はミシェル・フーコー (Michel Foucault) の論文「作者とは何か？」が発表されて以来、多くの論者によって議論されてきた。知的所有権が他ならぬアメリカ合衆国憲法において初めて明文化されたことを想起するならば、先に述べたワイ・チャー・ディモックなどによる先行研究は、メルヴィルの作品に個人主義の台頭と私的所有の関連性を見いだしている点において至極真つ当な解釈だといえる。それに対して、ワイナワーの捉えるメルヴィル像は極めて反動的であり、それゆえに画期的なものだといえるだろう。しかし、このような文学的連帯 (literary brotherhood) と

いう概念を措定することで、これまでみてきたような作家の匿名性とナショナリズムという戦略がはじめて両立可能になるのである。

#### 4. 結び

「ホーソンとその苔」において、メルヴィルはアメリカにおける批評家の不在を次のように嘆いている。“There are hardly five critics in America; and several of them are asleep.” (247) 小説家メルヴィルにとって何より歯がゆかったのは、文学の書き手が希薄だったことよりも、アメリカにおいて文学を正しく評価すべき批評家が存在しなかったことである。南部人を装い匿名で北部の作家ホーソンをたたえることで、メルヴィルは北部と南部とが同じ共同体を形成することを暗に確認し、その結果近代的なナショナリズム——アンダーソンによれば、それは文学の発達と密接に関係するものである——に訴えることに成功した。匿名で書くこととアメリカ文学のアイデンティティーを主張することの間には、矛盾ではなくむしろ合理的な必然性を見いだすことができるのである。

#### 注

1. Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839–1860*. Harrison Hayford et al eds. *The Writings of Herman Melville*. (Evanston: Northwestern UP and Newberry Library, 1987) 以後、原著のページ数はこの版による。
2. 国際著作権の問題がメルヴィルの作品にいかに関与を及ぼしたかについては、拙論「芸術における労働と人格——Israel Potter と著作権」を参照。

#### 参考文献

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Rev. Ed. New York: Verso, 1991.
- Charvat, William. *The Profession of Authorship in America 1800–1870*. 1968. Matthew J. Bruccoli ed. New York: Columbia UP, 1992.

- Dauber, Kenneth. *The Idea of Authorship in America: Democratic Poetics from Franklin to Melville*. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- Greenfeld, Liah. *Nationalism: Five Roads to Modernity*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1992.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor*. 1924. Harrison Hayford and Merton Sealts, Jr. Ed. Chicago: U of Chicago P, 1962.
- . “Hawthorne and His Mosses.” *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839–1860*. Harrison Hayford et al eds. *The Writings of Herman Melville*. Evanston: Northwestern UP and Newberry Library, 1987, 239–253.
- Pease, Donald E. “National Narratives, Postnational Narration.” *Modern Fiction Studies* 43.1 (1997): 1–23.
- Weinauer, Ellen. “Plagiarism and the Proprietary Self: Policing the Boundaries of Authorship in Herman Melville’s ‘Hawthorne and His Mosses.’” *American Literature*. 69.4 (1997): 697–717.
- Widmer, Edward L. *Young America: The Flowering of Democracy in New York City*. New York: Oxford UP, 1999.
- 大和田俊之「芸術における労働と人格——Israel Potter と著作権」『アメリカ文学研究』38 (2002), 5–20 頁。

## Herman Melville as a Critic: Literary Nationalism in “Hawthorne and His Mosses”

Toshiyuki Ohwada

This essay explores the diverse aspects of literary nationalism in Herman Melville's renowned essay, “Hawthorne and His Mosses” (1850). Whereas Melville champions the American writers and anticipates the emergence of “American literature,” —which means that he persists in the particular rather than the universal—he himself writes this essay anonymously and pretends as if he were “a Virginian Spending July in Vermont.” This auctorial strategy can be explained by the theory proposed by Benedict Anderson in his monumental work *Imagined Communities* (1991). According to Anderson, what differentiates the medieval era from the modern time is its sense of time. As the religious communities of medieval mind decline, the simultaneous sense of time has come to take place where a person can share the same sense of time with a total stranger living far away. Anderson concludes that this “idea of ‘homogeneous, empty time’,” to borrow from Benjamin, enabled to form the idea of nationalism. Then Melville, by disguising himself in the essay as a Southerner who has never seen Hawthorne, can be said to be reinforcing the idea of nationalism because of his anonymity.

Another significant aspect of Melville's essay is that he compares the “excellent books” to “foundlings.” Here, he seems to be suggesting that the authority of a literary work should be carefully denied. This contradicts

with the idea of “possessive individualism” proposed precedently by Wai Chee Dimock. However, by referring to the arguments of Ellen Weinauer, where she uncovers the new idea of “literary brotherhood” implied in Melville’s works, we conclude that the disappearance of the author’s name in Melville’s essay not only makes it possible to establish the idea of literary nationalism, but also suggests an alternative way of possessing art.